

ショウガ栽培プロジェクトで 地域力の創造を

種子島



遠藤 裕未 (えんどう ひろみ)

種子島西之表市出身。大学卒業後、一般企業に就職。1年半でNGOピースポートに転職。約8年の間に地球を9周し、訪れた国や地域は60以上。平成22年9月より故郷の種子島に「地域おこし協力隊」としてUターン。現在、「なかわり生姜山農園」を運営。



農園サポーターの皆さん、ショウガ収穫祭にて。

◆外へ向いていた目をふるさとの島へ

高校卒業後、大学進学と同時に島を離れた私は、限られた「島」という空間や、濃すぎる人間関係から解放された思いから外の世界にばかり目を向け、海外で活躍できるNGOピースポートの仕事に熱中するようになりました。その仕事を通して、ほかの国に負荷を与えない暮らし方、そうした意識を持つ消費者を増やしていくこと、また都市に人口を集中させず、地方に向かう人々の流れをつくることが必要なのではないかと考えるようになりました。そんな中、久しぶりに同窓会で帰島した際、ふと自分の故郷に目を向けてみると、母校の中学校が統廃合されて一校になるほど人口が減っている現実を目のあたりにしました。

故郷の現状への危機感から、まずは期間限定でも自分が島に暮らそうと仕事を退職し、市内の海水浴場で使用されなくなった倉庫を借りて、夏の間コミュニティカフェを運営することを決意しました。市役所に使用許可をとり、運営を開始したのが平成二十二年七月のことでした。夏が終わると、すでに実家に移っていた埼玉に戻り、来季へ向けて貯金をするために働きました。このサイクルで、ちよūd二度目の夏のシーズンを迎える準備を島でしていたとき、「地域おこし協力隊」の募集を知りました。その仕事内容は、まさに私が関わりたいと思っていたことでし

た。やりたい仕事をしながら移住できるという条件に惹かれて応募。これが、島での地域おこし活動に本格的に携わるスタートとなりました。

◆生姜山の由来となったシヨウガでプロジェクト

平成二二年九月に赴任してすぐに、市内で唯一の休校小学校を抱える中割校区長から、この休校小学校で一年に一度行われている「ふるさと交流大会」をもっと盛り上げたいという相談が寄せられました。内容を具体的にうかがうために小学校を訪れてみると、「ヤクタネゴヨウ」という屋久島と種子島にしかない五葉松をシンボルに抱える、こぢんまりとした雰囲気魅力的な小学校でした。この小学校の目の前の集落公民館駐車場脇に、「生姜山」と書かれた小さなバス停がありました。聞くと、ここの集落名が「生姜山集落」だからということでした。冷え性だった私は、シヨウガを使ってからだを温めるということを日々の暮らしに取り入れていたので、シヨウガの名前がつく集落があることがとても印象に残りました。

相談内容であった「ふるさと交流大会」は、夏休み中に、地域の人たちと落花生の収穫体験を行い、その後グランドゴルフを楽しむというイベントでした。しかし、一過性のイベントだけを継続しても、地域の活性化にはなかなかつながらないと感じたので、先ほどの「生姜山」という集落

名を生かしたプロジェクトを計画し、その一環として交流イベントを行ったらいいのではないかと考え、具体的なプランを提案しました。

休校中の小学校を拠点に、生姜山集落の名前の由来でもあり、健康野菜の代表でもあるシヨウガを耕作放棄地で栽培・商品化し、小さな雇用と交流の場づくりを行うという内容です。このプランを実現するためにまずシヨウガを栽培しようという段階で、当時の区長たちが、すぐに集落内の耕作放棄地を手配してくれました。そして、ほかの集落のメンバーにも声をかけ、放棄地の草払いから畑にするまでの作業を行い「なかわり生姜山農園」が誕生しました。同時に、この取り組みに市街地の協力者が参加できる「農園サポーター」制度を設けました。初年度のサポーターには、移住者や転勤家族を中心に、三〇名ほど集まりました。おかげで、はじめてのシヨウガの植えつけイベントを、賑やかに行うことができました。この時点では、有志メンバーによる取り組みでしたが、活動を本格化させ、



九州本土最南端の佐多岬から南東方向に約40km、鹿児島市から約115kmにある島。西之表市は、種子島の北部に位置する。



開発したショウガのジャムや紅茶などの商品。



「元気を養う学びの場」開催の様子。

収穫できたショウガの加工や定期的な交流イベントを開催するために、総務省の補助金採択を目指しました。この応募にあたり、市役所内での合意形成を得ることに苦勞しました。まだ赴任して半年も経たない協力隊員のプランに、予算をつける価値があるのか、運営能力があるのかといった不安があったのだと思います。そのようなときに、ショウガブームの火付け役として有名な石原結實^{ゆづみ}医師が、「ふるさと納税」を行うほど種子島に縁のある方だということを知りました。そこで、先生に協力を依頼し、著名な方の後押しと、すでに集落の人たちが有志でショウガ栽培をはじめていて、やる気をみせていたこともあり、応募できることになりました。

翌年度の六月には採択が決定し、七月から本格的な活動をスタートさせることができました。早速、元大工さんな

どが活躍し、小学校の改修などを行っていききました。また、農薬や化学肥料を使わない栽培方法に関する勉強会などを開催する「元気を養う学びの場」の運営も開始しました。

この学びの場は、地域の学びの場としての小学校の役割を少しでも維持できることを目指しました。そして、実施母体であった実行委員会を「一般社団法人」として組織化し、取り組みを事業として継続できる土台をつくりました。土台ができたところで、最初に収穫されたショウガを、翌年の植えつけ用の種と試作品づくりを活用。二年目には、「七〇歳からのポランティアバイト」を募集し、集落のお年寄りに加工作業をしていただきました。そして、この成果として、「100%種子島しょうが紅茶」と「乾燥しょうが」を商品化し、三年目には「しょうがのジャム」やギフトセットまでラインナップとして揃えることができるようになりました。いくつもの流通に乗せることができる商品総数ではありませんが、島内の四ヶ所で委託販売ができるようにもなりました。また、二年目に栽培規模を増やすにあたり、ショウガのオーナー制度である「マイジンジャープロジェクト」を開始しました。収穫を楽しむに待っていていてくれる人がいるということ、栽培に張り合いもたように思います。

こういった取り組みを、活動をスタートさせてから二年あまりで実現してきたということを評価され、平

成二五年の過疎地域等自立活性化優良事例表彰にて、全国過疎地域自立促進連盟会長賞を受賞しました。この受賞により、取り組みを継続させていかなければという意識を強くすることができたように思います。

◆協力隊員から持続的な生産者としての取り組みへ

「一般社団法人なかわり生姜山農園」の業務執行理事に就任し、事務局長を務めることとなりました。「長」はつきませんが、パソコン作業ができる人が私だけという状況なので、経理から営業活動に必要な事務作業、ホームページからの注文や問い合わせへの対応や情報発信など、農作業や加工作业以外の部分を一人でこなすという状況です。また、過疎高齢地域の法人で予算もないため、かなり活動が制限されています。それでも、

出郷者の方の協力や、活動に賛同して応援してくれている方

受け入れ側からみた隊員の活動

●島の現状

種子島の最高点は標高270mと比較的平坦な地形で、黒潮の影響を受けて温暖である。人口は、市制施行当初（約3万3000人）をピークに50%まで減少し、雇用の受け皿がないことから人口流出に歯止めがかからない状況にある。とくに、中割校区は高齢化率が50%に近く、市内においてもっとも過疎高齢化が問題となっている小学校区だ。

●隊員の活躍

その地域の中心であった小学校が平成14年度より休校となり、地域での活動が衰退してきた状況の中で、そうした状況に歯止めをかけるもっと効果的な取り組みができないものかと地域民の問いかけと、隊員の活動が合致して、中割校区との関わりが始まった。

まずは、隊員自らが中割校区にある生姜山のルーツを訪ね、地域民がこの地域をどうしたいのか、どう思っているのか、その考えを引き出すためのワークショップを開催した。こうした取り組みは、地域民と隊員の垣根を越えての信頼関係につながったのではないだろうか。高齢者にとって人前で意見を出すというのは、おっくうでいやなものであるし、足が向かないものだが、回数を重ねるたびに、いろいろな意見が飛び出してくるようになった。そうした空気をつくることができたのは、隊員のこれまで培った経験の賜物であると思う。

●これからへ向けて

この制度を使った活性化は、地域をどうにかしたいという地域民と隊員、両者の思いがないと、片方だけではうまく実現していかないし、長続きもしない。隊員のコーディネート力と地域民のやる気がうまくマッチしたからこそ、わずか3年で住民の隠れたパワーを顕在化させることができたのだと思う。地域外の方でその地域の人をパワーアップさせる、今後のモデルケースになるだろう。

ショウガの植えつけから収穫加工などによる地域内外との交流や高齢者の生きがいづくりなどが地元メディアにも取り上げられ、認知度もあがり、集落は誇りと賑わいをとりもどした。

活動終了後、夫婦で定住して農園で汗を流す姿に感銘した。今後、行政としても末永く見守り続けたい。

(鹿児島県西之表市地域支援課 松下成梧)

おかげで、なんとか協力隊卒業後二年目を迎えています。栽培技術もだいぶ上がってきたおかげで、今年も青果としての出荷も計画中です。今年度中には、なんとか売り上げ目標を達成させ、来年度からは、廃校が決定してしまっただ現在の拠点場所である小学校を、地域内外の交流の場、小さな雇用の場、そしてUターン者やIターン者が島で新しい取り組みができる地域力創造の場として活用できるような場づくりにも取り組みたいと考えています。